

中長期目標 (学校ビジョン)		夢や希望に向かい 自分らしく輝いて たくましく生きる力を育む。		今年度の 重点目標	1 学習指導・授業改善に努める【授業実践の充実】 2 児童生徒の健康と安全を守る【QOLの向上】 3 「チームとりよ」を推進する【連携・協働・業務改善】	《キーワード》「可能性」	
年 度							
評価項目	評価の具体項目	現 状	目標(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	到達状況	(10)月 評 価 改善策	
1 学習指導・ 授業改善に努める【授業実践の充実】	小学部	○自分らしさを発揮し、願い、願いを抱き意欲的に学ぶ授業づくり	・勉強会を通して、授業づくりや教材等に関する情報交換ができ、各クラスで児童の実態に応じた教材や題材を工夫し、興味関心が高まっている様子がみられているが、児童の内面の願いを理解し、引き出す授業づくりがさらに必要である。	・教材や指導方法に関する情報交換が日常的に行われ、児童の実態や興味関心に応じた授業が実践され、児童が安心して自分らしさを発揮する姿が多く見られ、児童の願いに寄り添っている。	・勉強会や掲示版を通して、授業づくりに関する情報共有を継続する。 ・勉強会等の資料をいつでも見られるように保存する。	C ・授業づくりの基礎となる児童理解のための授業把持のためのチャート活用の活用、小グループでの目標検討会を行った。 ・研究研修部と連携し、授業づくりの勉強会を授業の映像や教材等を使って行った。 ・授業作りについて各クラスで工夫はできているが、情報共有には至っていない。	
	中学部	○一人一人の課題や教育的ニーズに応じた授業づくり	・教育的ニーズや支援について共通理解を深めることで、生徒が見通しをもち、主体的に取り組める授業づくりが活かすことができるようになってきた。(共通) ・個々の教育的ニーズに応じた実践をしており、生徒も意欲的に授業に取り組んでいる。しかし、生活に根ざした場面で活用できなかったり、諸検査等の結果に現れない現状がある。(単一障がい学校)	・実態把握をもとに根拠ある支援が行われ、生徒は「わかる」「できた」と実感する自己肯定感が向上し、主体的に学習に取り組んでいる。 ・教育的ニーズや支援について共通理解が深まり、それらに応じた的確な目標設定のもとに授業づくりが行われている。	・実態把握をもとに教育的ニーズを明確にし、効果的なICT活用や教材・支援の工夫を行うことで、主体性を促すとともに学習の理解を深める。(共通) ・単元の始めと終わりに学習グループで目標や支援について確認の会を実施する。(重複障がい学校)	C ・担任だけでなく関与の多い教職員で生徒の様子を日頃から話し合い、実態把握の共通理解を深めることで、主体的に学習に取り組む姿が多く見られるようになってきた。 ・特に単元の目標や支援を確認して授業に取り組むことはできているが、学習後に反省する機会を持つことは難しかった。	
	高等部	○キャリア教育の視点に立った授業づくり	・各担任、教科担当が生徒一人ひとりの自立と社会参加を目指して授業実践を行っている。キャリア教育の視点に立った個々の課題やつけない力について共通理解をより深め、それを指導に生かしていく取り組みが必要である。	・キャリア教育の視点より意識しながら、個々の課題やつけない力について教員の間でしっかりと共通理解が行われ、ねらいに沿った授業づくりが行われている。 ・未来に向かって小さなチャレンジを積み重ねることで、意欲をもって主体的に学ぶとする生徒を育てる。	・キャリア教育の視点について学部全体で共通理解する機会をもち、そこを土台として生徒の課題やつけない力について共有し、授業の取り組みや生徒の様子について共有するための会を月1回以上持つ。	・学部全体や単一重複それぞれの会などでキャリア教育の視点について共通理解をし、それを授業づくりに生かしているところである。しかし、多様なニーズへの対応が必要で、個々に応じて十分に深まっていない面も見られる。	C ・今後もしいろいろな機会を生かしてキャリア教育について共通理解し、授業に生かすよう努める。 ・個々に合わせた具体的な課題など、ニーズに合わせた話し合いの内容を工夫する。
	教務部	○とりよのまなびの視点と結びついた諸計画の在り方についての検討	・とりよのまなびの視点と、作成している諸計画とのつながりについての意識や理解が浸透しきっていないことや、作成の努力とそれに対する有用感とが比例していないと感じている教員が多い。 ・新学習指導要領への移行に伴い、諸様式の見直し、整備を行っていく必要がある。	・個別的教育支援計画、個別の指導計画の作成にあたり、本校として必要な手順や視点についてまとめている。	・とりよのまなびプロジェクトで、関係分掌と話し合いながら諸計画を作成する意義や有用なものにするために必要な内容などについて確認、整理する。 ・研究日や子どもを語る会、学部会などの時間も利用しながら意見交換や理解推進を行う。	・職員アンケートを実施し、本校の諸計画の作成段階や活用段階での課題についてまとめた。関係分掌同士で情報共有し、課題に対する改善策を検討中である。 ・様式の改善までには至っていない。 ・単元計画等が新学習指導要領の内容を意識したものにならなければならない。	C ・とりよのまなびプロジェクトで、目標設定や評価に必要な視点等についてまとめた。様式の改善につなげる。 ・諸書式を作成する意義や作成に必要な視点についての共通理解をする研修を行う。
	研究研修部	○主体的な学びを育む授業づくり	・「とりよのまなび」の視点による教育的ニーズの把握と個別の支援が図られてきているが、新学習指導要領の改訂にあわせて、個別の目標設定と評価について検討していく必要がある。 ・「主体的な学び」の具体的な姿をもとにした授業改善により一層取り組むために、授業展開や指導方法の工夫を図る必要がある。	・新学習指導要領の3観点での目標設定と評価を検討し、一人またはグループで授業の実践に取り入れる模案が行われている。 ・教科の特性に応じた「見方・考え方」を働かせる授業づくりや、「合わせた指導」において年間指導計画の修正が行われている。	・「とりよのまなび」や本校の授業づくりについて共通理解を深めると共に、教科の特性や学習評価について学ぶ機会を設け、目標設定と評価を改善検討する。 ・教科別、学部別研究グループの活動を通して、教科の特性に応じた授業づくりや、合わせた指導の年間指導計画の検討を行う。	・新学習指導要領の3観点での目標設定と評価について、グループ研究で資料を読み合った(単一)・授業計画シートを作成し、授業の実践を行なった。 ・授業の実践に向けては、具体的な取り組みを検討しつつある。 ・教科の特性に応じた「見方・考え方」を働かせる授業のための教材や支援の工夫について各教科で検討を行う。また、「合わせた指導」における年間指導計画の修正を「授業計画シート」の作成と合わせて進めているところである。	C ・新学習指導要領の3観点での目標設定と評価について各研究グループで引き続き学ぶ機会を設け、検討を行っている。一人またはグループで授業の実践を行なったが、具体的な取り組みについて検討している。 ・授業の実践を通して、各教科における「見方・考え方」を働かせる授業のための教材や支援の工夫について各教科で検討を行う。また、「合わせた指導」に基づいた、合わせた指導における年間指導計画の修正を「授業計画シート」の作成と合わせて進めているところである。
2 児童生徒の健康と安全を守る【QOLの向上】	自立活動部	○児童生徒の実態に応じた、自立活動の適切な目標設定と指導内容の充実	・昨年度、自立活動目標設定シートを作成し、それを活用して目標設定を行うようにした。これに伴い、目標検討会のやり方も刷新した。活用にあたり、研修会を開いて共通理解を図ったが、活用初年度といふこともあり、難しさを感ずる職員も多い。 ・お役立ち勉強会(自主勉強会)や自立活動情報誌「MANABI」等で、自立活動の指導に関する情報を定期的に提供している。 ・新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から、開催する研修会の精選を行う必要がある。	・自立活動目標設定シートを活用した目標設定について、7割以上の職員が昨年度より理解できた、もしくはスムーズだったと感じている。 ・主眼とした各種研修会の内容が、教職員にとって日々の授業実践に役立つものであったと感じている。(7割以上)	・自立活動目標設定シートの活用に関する研修を開催する。また、目標検討会時に自立活動部員が助言できるようにグループ編成を工夫し、アンケートを実施する。 ・MANABIを年4回以上発行するとともに、お役立ち勉強会等、実践に役立つ研修を年4回以上実施し、アンケートをとる。	C ・目標設定に関わる研修を実施し、校内職員への理解と啓蒙を深めた。アンケートでも肯定的な意見が多かった。夏季休業中の目標検討会には、自立活動部員が学部を超えて参加することで目標設定までの考え方を伝えることができた。 ・とりよ夏季セミナーをはじめ、新型コロナウイルスの関係で開催できない研修会もあった。また、実施しても密にならないような工夫が求められたため、実技を伴う研修会は開催できなかった。 ・MANABIは予定通り発行することができている。	
	情報教育部	○ICTを活用した授業実践の推進と充実	・情報モラルの児童生徒への指導に課題がある。 ・学習保障事業(オリビタ)及びアプリを活用した双方向の情報発信(遠隔授業等)に取り組む必要がある。	・教員が情報モラルについて理解し、情報モラルの指導ができる。 ・オリビタを含めた様々なアプリを活用した双方向の情報発信(遠隔授業等)を行うことができる教員が7割以上となる。	・教職員が児童生徒の実態に応じたICT活用が行えるように、関係機関等と連携した研修会を行った。 ・iPad等を使用した双方向の情報発信、テレビ会議システムの説明会の実施、実践の紹介を行う。	B ・ICT利活用の推進、テレビ会議システムの利用方法、実践例について夏季休業中にICT情報研修会を行った。 ・テレビ会議システムを活用した学部集会、他校との交流会、他クラスとの交流、合同学習等が実践されている。	
	小学部	○健康を守るための学習内容や学習形態の工夫と教室環境づくり	・各クラスで衛生管理に留意し、室温の管理など児童一人一人に応じた対応がなされているが、感染症拡大予防対策のため、児童の健康を守り安心して学校生活が送られるように、学習内容や学習形態を従来とは変更している。	・児童一人一人の障がい・特性や体調を踏まえた教室の衛生管理や空調調整がなされている。 ・感染症拡大予防対策に努めながら、学習内容や学習形態を工夫し、現状のなかでの学習保障がきている。	・衛生管理に関する物品の点検や教室環境を整えるうえでポイントの標準化などに取り組む。 ・感染症拡大予防対策のための情報交換の場を設定し、児童・教職員の不安の軽減をする。	B ・児童全員の平常の健康状態を一覧表にまとめ、担任間で改めて確認すること子どもを語る会として学部全体で共通理解を行った。 ・児童全員の適温・湿度を一覧表にまとめ、クラスとして工夫していることを学部会の中で情報交換した。 ・感染症拡大予防対策に努めているが、日々の変化に対して学校全体での共通理解の周知に難しさを感じる場面がある。	
	中学部	○生徒が安心感の面でより主体的に活動できる教室環境の整備	・生徒の心や身体の変化について共通理解の場を設けて、学校や教室が安心して過ごせる居心地のよい場となり、生徒が主体的に活動している。	・職員同士が生徒の共通理解を深めることで、学校や教室が安心して過ごせる居心地のよい場となり、生徒が主体的に活動している。	・生徒個々の体調や心身の変化等への具体的な配慮ポイントについて記録し、学部会、子どもを語る会等で情報交換や共通理解を深める。 ・わかりやすい記録の取り方について、書式等情報交換を行う機会を持つ。教室環境についてはお互いに見合ったり、写真で紹介しあう。	・学級に関わる教職員同士で、日々の生徒の様子や体調、心身の健康について情報交換しながら、生徒が安心して生活できる教室環境、授業環境づくりに配慮できている。 ・他クラスの記録の取り方や、教室環境の情報交換をする機会が少なかった。	B ・話し合いの会をする場所をもちまわすることで、教室環境について情報交換できるようにする。
	高等部	○生徒が安心して学べる教育環境づくり	・生徒の特性や体調についての共通理解を行っている。様々な場面を予想し、早めの対応や未然防止について共通理解した上で取り組みをしているが、十分ではない。(単一障がい学校) ・年度や季節の変わり目に体調が崩れがちなったり、成長とともに今までになかった体調の変化がみられたりする(重複障がい学校)	・生徒の特性や体調についての共通理解を行っている。様々な場面を予想し、早めの対応や未然防止について共通理解した上で取り組みをしているが、十分ではない。(単一障がい学校) ・年度や季節の変わり目に体調が崩れがちなったり、成長とともに今までになかった体調の変化がみられたりする(重複障がい学校)	・生徒が心身ともに安心して学校生活を送れるように情報と共有し、対応をすることができている。(単一障がい学校) ・感染の予防に留意しながら、日頃の生徒の様子を丁寧に関察したり情報交換したりすることで、早めに対応することができている。(重複障がい学校)	・より適切な指導ができるように日々の情報交換を密にし、生徒の心身の様子を早めに把握できるようにする。(単一障がい学校) ・生徒の心身の状況を日々の健康観察等で把握し、担任間で情報交換をしたうえで実地教育に相談したりして、心身の健康がより良好に維持できるようにする。(重複障がい学校)	B ・生徒一人ひとりの心身の様子について情報共有を主に行い、必要に応じて適切な安全と安心な環境作りを努めた。(単一障がい学校) ・感染予防や体調管理に関しては、担任間をはじめ、関係者に対してスピーディーな報告・連絡・相談することに努めた。(重複障がい学校) ・クラス単位ではなく、より相談範囲を広げた取り組みが必要なケースへの対応が十分ではない面もあった。
保健安全部	○児童生徒が安心して学校生活を送る環境整備と体制づくり	・安全で健康的な学校生活を送ることができるように、基本的事項や児童生徒への対応についての研修を行っているが、感染症拡大予防対策の為、現状に応じた計画や見直しが必要である。 ・地震、火災時の避難経路や場所、児童生徒の引き渡し等、課題が残っている。防災委員会、総務部と連携を図っていく必要がある。	・個に応じた緊急救急体制が学級・学部・学校で共通理解され、危機管理意識を持ち、環境や体制が整備されている。 ・新連絡通達書により、災害時の緊急対応について検討し、体制が確立している。	・研修や各種訓練の反省、緊急・防災ウィークでの気づきから、安全面・健康面に関する対応を行う。 ・昨年度の課題点から救急体制を制作し、防災委員会を開催して体制を決定する。	・新型コロナウイルス感染症拡大予防の為、研修や各種訓練等を可能な限り実施した。普段と違う視点で確認できたこと、気づきや反省をもとに課題や改善点を検討した。避難経路の共通理解は周知できたが、防災、防災の危機管理意識を身につけたり環境整備については啓発し続けることが必要である。 ・災害時の体制について、現在工事中の箇所や新駐車場を考慮した避難体制の確立に至っていない。	B ・医学講座や研修、各種訓練等であった課題を分掌内で検討し、様々な状況を想定しながら対応していく。 ・学校保健、全道の避難経路や避難場所と合わせた環境整備と体制づくりについて防災委員会と連携して遂行していく。	

年 度 当 初						(10)月	
評価項目	評価の具体項目	現 状	目標(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	到達状況	改善策	
3「チームとり よう」を推進する 【連携・協 働・業務改善】	小学 部	○保護者や関係 機関と連携した指 導支援の充実と同 僚性の向上	・保護者・関係機関と児童の情報を共有し ながら、研修に取り組み、各自の専門性を 高めながら、互いに支えあう教職員集団と なっている。	・助言内容等について学部全体に周知したいことについては、 回覧やPC上で共通理解が図れるようにする	・感染症予防対策に関して保護者や関係機関と連携す ること、制限がある中、指導支援の充実を図ることが困難 であった。 ・直接的には難しい中、連絡帳や電話連絡を通して、保 護者との連携に努めた。HP、通信を通して、写真等で 学校での指導の様子を伝え、保護者の不安を軽減する ように努めた。	・保護者や関係機関との連携の仕方を工夫し、感染症 予防に努めながらできることをやっけいき、その結果 を回覧等で学部内で共通理解を図るようにする。 ・子どもを語る会、勉強会を通して互いに意見や悩みを 出し合い、同僚性が向上するようにする。	
	中学 部	○自己実現に向け た指導・支援を行 うための連携の在 り方	・自らの進路に対する意識は少しずつ高まってき ているが、まだ自分の問題として考えることのできて いない生徒もいる。(単一障がい・学級) ・学校、保護者、関係機関等との連携強化に努めて きたが、進路に関する情報については十分な情報 提供ができていない。	・将来の姿をイメージし、そのためにどんな 力が必要かを考えるよう、指導や支援が適切 に行われている。 ・生徒一人一人の病気や障がいの状態や 特性に応じた適切な支援を行うために、保 護者・関係機関との連携を深めている。	・高等部の教育課程や学びの実態を生徒に知らせたり、本校以 外の高校や高校卒業後の福祉施設等の実態を伝えたりする学 習の場を設定する。(単一障がい・学級) ・職場体験、校内作業実習、福祉施設等利用週間に際し、具 体的な資料を使って進路情報を提供し、卒業後を見据えた支援を 行う。	・3年生は進路について具体的にどのようなことをしてお けるかを考える機会を持つことで、生徒一人一人の進 路への意識が高まってきている。 ・キャリア教育参観日に進路情報を提供する機会であ ったが、新型コロナウイルス感染防止のため学級懇談や 全体説明を持つことができず、資料配布に留まった。	・2学期に実施予定であった職場体験、福祉施設・関係 機関利用週間の中止が決まっていたため、校内作業実 習の折に卒業後の進路について話し合う機会をもつ。 (単一) ・進路指導部と連携して、進路情報を学部だよりで伝 えるよう努める。
	高等 部	○確かな進路実現 に向けての支援体 制づくり	・高等部卒業後の進路として生活介護から一般就 業、進学等多様であり、それぞれの進路に応じた指 導・支援が必要である。	・職場見学や体験等の経験を生かして、そ れぞれの進路に応じた指導・支援が適切 に行われている。	・より適切な進路指導ができるように、学部会等を利用して進路 に関する情報共有の場を年4回以上設ける。 ・本人や保護者の進路に関する希望を元に、具体的な計画やス ケジュールを立てて、進路指導主事とも連携しながら、進路実現 に向けての指導・支援を進めていく。	・感染症予防のため進路に向けての体験学習ができな い状況が続いている。 ・進路指導主事と連携を図りながら進 路に関する指導・支援を行った。	・保護者も含めた共通理解、情報交換、環境整備に引 き続き努める。 ・校外模試への参加等、それぞれの進路に合った取り 組みを検討・実施していく。
	支援 部	○地域におけるセ ンターの機能の充 実	・外部からの障がいの状態に応じた様々な支援や就 学、進学に関する相談に対して、校内の職員の専門 性を活用し、できるだけチームで対応するようにして いる。 ・校外からの教育相談や特別支援教育研修会、交 流及び共同学習等、本校のセンターの機能の取 組みについて校内の職員へ周知・理解を進めてい る。	・エキスパート教員や学部主事等と連携し ながら、適切な支援方法の提供や就学相 談を行っている。(地域支援) ・本校のセンター的機能について、教職員 が周知・理解している。	・エキスパート教員等を中心として地域へのセンター的機能が 果たせるよう、特別支援教育研修会の持ち方、内容を工夫す る。 ・掲示板や職員連絡等で、本校が行っているセンター的機能の 取り組みについて報告する機会を設ける。	・感染症対策をしながら、エキスパート教員を中心とした リモートでの研修会、電話での相談、対象児童の活動 の様子を録画した物を見てエキスパート教員からのアド バイスを伝える等、できる形を工夫して行っている。 ・センターの機能の取り組みについて職員会等で伝え ているが十分でない。	・リモート等、できる形を工夫して地域のニーズに応えら れるよう、情報機器の使い方を知る。 ・センターの機能の取り組みについて、「学校の日」の 支援部のページを活用して情報発信をしていく。
	文化 部	○わくわくフェスタ の意義の共通理 解と効率的な運営	・学校の一日にわくわくフェスタを開催することで、情 報が共有しやすくなった。 ・わくわくフェスタの捉えが職員に浸透していないとやや感 じられる。	・全職員がわくわくフェスタ全体の流れや 担当する仕事内容を把握しながら、連携し て運営することができた。7割以上の人が 感じている。	・進にでもわかるシステムの明確化(見やすいフォルダ) ・わくわくフェスタの意義を早めに提案し、全職員で共通理解する。	・学校の一日等を通じて情報伝達には努めているが、ど こまで伝えられているか、共通理解はできているか不確 かな面がある。 ・具体的な取り組みは学部単位となるため、全体の状況 がとらえにくい。 ・新型コロナウイルス対策を土台に、今年状況に応じ たわくわくフェスタを考えている。	・学校の一日に加えて、学部単位や個々の職員に対す る連絡等を行いながら情報の浸透を図る。 ・終了後にアンケートを実施し、集約した意見を今後の 改善に活かす。
キャ リア 教育 部	○本校の進路・ キャリア教育の取 組みや収集した情 報の発信	・本校の進路の流れやキャリア教育・人権教育の基 本的な考え方について、教職員に定着していない 部分がある。 ・学校説明会、参観日等で卒業後の進路やキャリア 教育、人権教育について説明してきたが、十分に伝 わっていない面がある。	・進路の流れやキャリア教育・人権教育の 基本的な考え方について教職員で共通理 解し、実態に応じた目標を意識して指導を している。	・校内研修(全体、学部等)を2回以上計画し、進路、キャリア、 人権教育について教職員で共通理解する。 ・教職員、保護者への情報提供の方法を整理し、必要な情報が 伝わるよう工夫する。	・「障がいの社会モデルと共生社会」について講師のリ モート参加による人権教育研修会を行い、教職員の認 識を深めた。 ・本校のキャリア教育の取り組みを研修会で説明し、教 職員の理解を広めた。 ・キャリア教育の視点での公開学習を行い、保護者の理 解を促した。 ・キャリア教育の視点や進路決定の流れなどの基本的 な内容についてプリントにまとめ、保護者へ配布した。ま た、懇談でキャリア教育に関する話もできた。	・参観授業や日々の実践など今年度の取り組みについ て振り返り、キャリア教育の視点を見直す機会を設ける。 ・学部会等で機会をつくり、その時に必要な情報提供を する。 ・支援部と連携して保護者への情報提供を行う。	
総 務 部	○分掌業務の見 直し	・再編や削減した業務、未来企画委員会で検討した 内容の進捗状況を確認し、年間の教育活動を通し て不具合がないか検討し、調整を図ることが必要で ある。	・年度末には、再編・削減した業務、未来 企画委員会等で検討した内容について、 不具合の有無が確認され、不具合のある7 0%以上の項目について分掌間で調整さ れている。	・再編・削減した業務、未来企画部で検討した内容を総務部内 で確認し、職員に周知する。(5・6月) ・7月・11月にアンケートを行い、再編・削減した業務における不 具合を確認し、調整する。	・再編・削減した業務を分掌部長に確認した。 ・各分掌における、人員・担当業務の問題点、現時点に おける業務の問題点を聞き取った。 ・再編や削減した業務内容については、特に不具合は なかった。 ・いろいろな状況が変化し、昨年度未来企画委員会で 検討した内容の見直しの必要性を確認した。	・分掌業務の問題点を聞き取り、総務部内で検討し、改 善を図る。 ・未来企画委員会が検討する内容を見直し、10月以降 に検討を進める。	

A:十分達成(90%以上または目標値以上) B:おおむね達成(70～90%未満または目標値の70～90%未満) C:できつつある(40～70%未満または目標値の40～70%未満) D変化の兆し(20%～40%未満または目標値の20%～40%未満) E:まだ不十分(20%未満または目標値の20%未満)